

1. 開催概要

展覧会名	ゴッホ展 巡りゆく日本の夢	
開催施設名	会期	入場者数
北海道立近代美術館	2017年8月26日～10月15日	199, 334人
東京都美術館	2017年10月24日～2018年1月8日	370, 031人
京都国立近代美術館	2018年1月20日～3月4日	183, 446人

●開催概要

1853年オランダに生まれたフィンセント・ファン・ゴッホは、1886年にパリに出て自身の絵画表現を模索する中、当時パリを席卷していたジャポニスムに触れ、浮世絵をはじめとした日本美術に出会い大きな影響を受けたといわれている。そして単なる浮世絵の模倣に留まらず、構図や色彩表現、モチーフなどからも独自の日本イメージを醸成し、理想郷としての日本を投影してアルルに移り住んで以降、今に名高い数々の傑作を生んでいくこととなる。

本展では、ファン・ゴッホが日本からどのような影響を受け、どのようなイメージを描いていたのか、関連する浮世絵や同時代作家の作品もあわせて紹介する中で、様々な側面からファン・ゴッホが受けた日本の影響を紹介した。

また一方で、ファン・ゴッホの死後に日本人が彼からどのような影響を受けたかについても調査し、展覧会の中で1章を割いて、一方的な憧れに留まらないファン・ゴッホと日本の関係について総合的に検証した。

ファン・ゴッホは1890年にフランス・オーヴェールで亡くなったが、その最期を看取ったポール＝フェルディナン・ガシェ医師没後、当地ではその息子が父のもとに残された絵画を大切に守り伝えていた。当時はまだパリでもあまり見ることのできなかつたファン・ゴッホ作品を求め、多くの日本人が終焉の地オーヴェールを訪れた足跡は、ガシェ家に残された3冊の芳名録に克明に刻まれ、その中には、里美勝蔵や佐伯祐三、前田寛治ら数多くの画家に加え、歌人の斎藤茂吉や精神科医で日本のファン・ゴッホ受容に大きな役割を果たした式場隆三郎らの名前も記されている。

本展では、現在、フランスのギメ東洋美術館に所蔵されている芳名録を日本で初公開し、その芳名録をひも解くことで、日本でのファン・ゴッホの初期受容を探る一助にもなったと考える。

全会場合計の入場者数は752, 811人で、ほぼ目標人数を達成した。世界各国からのファン・ゴッホ作品に加え、浮世絵との対比や、第2部の日本人巡礼者の多彩さに、日本とファン・ゴッホにこのような深い関係性があったことを初めて知ったという来場者も多く、その相互関係を広く知ってもらうという当初目的も十分に果たすことができたと思う。

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

(1) 展示作品の質・量の充実

本制度の適用により、ファン・ゴッホ「画家としての自画像」「ポプラ林の中の二人」など、ファン・ゴッホの代表作やコンセプト上重要な作品を追加で借用することができた。また、ファン・ゴッホから影響を受けた日本人の調査も当初見込み以上に行い、展覧会で披露することができ、充実した内容で開催することができた。

(2) 入場料の無料化・軽減、鑑賞機会の拡大等

評価額の非常に高いファン・ゴッホ作品を借りるにあたり、3会場とも当初は有料の入場者に対し、100円高い金額を設定していたが、本制度活用により増額せずに済み、結果としてより多くの入場者を見込めたと考える。東京都美術館、京都国立近代美術館では従来通り中学生以下を入場無料としたが、展覧会ごとに無料化を検討するのが通例の北海道立近代美術館でも小学生以下を無料とした。北海道では今回の無料措置により、小学生以下 7,639 人が無料で観覧した。

また、北海道以外の東京・京都でも鑑賞機会拡大のため下記を実施したが、監視・警備等の人件費などかかる経費を軽減された保険料で充当することができた。

① スペシャル・マンデー(東京)＝都内の幼保小中高等学校対象の特別鑑賞会(東京)

2017年11月13日(月)実施 147人参加

② 障がい者内覧会(東京)＝2017年12/11(月)実施 1,153人参加

③ ファミリーアワー「ゴッホモーニング」(京都)＝親子向け展示解説と紙芝居上映

2018年2/12(月・休) 140名参加

(3) 教育普及活動

◎ 講演会・シンポジウム等

・8月26日(土)午前10時30分～、北海道立近代美術館講堂(定員230人)

「ジャポネズリーは永遠にーファン・ゴッホにとっての日本」

講師／コルネリア・ホンブルク氏(本展監修者)

・9月9日(土)午後2時～、北海道立近代美術館講堂(定員230人)

「ファン・ゴッホー日本の夢をめぐってー」

講師／園府寺司氏(本展監修者、大阪大学文学研究科教授)

・10月24日(土)午後2時～、東京都美術館講堂(定員225人)

「ファン・ゴッホ展記念シンポジウム」

パネリスト／ドヴ・ビング氏(ニュージーランド・ワイカト大学人文社会学部名誉教授、ビング・アーカイブ所蔵者)、園府寺司氏、コルネリア・ホンブルク氏、尾本圭子氏(美術史家)

・11月18日(土)午後2時～、東京都美術館講堂(定員220人)

「ユートピアを探して:ファン・ゴッホが夢見た日本」

講師／原田マハ氏(小説家)

・1月20日(土)午後2時～、京都国立近代美術館講堂(定員100人)

「<ファン・ゴッホと日本>についての最新の知見」

講師／園府寺司氏

・2月4日(日)午後2時～、京都国立近代美術館講堂(定員100人)

記念トークショー「<ラングロワの橋>—断片をもとに失われた作品を復元する挑戦—」

出演者／園府寺司氏

古賀陽子氏(画家、全編油絵アニメーション「ゴッホ～最期の手紙～」唯一の日本人参加者)

(4)インバウンド対策

年々増えている海外旅行者や在日外国人へ日本のホスピタリティを広く示すため、特に旅行者の多い会場で下記を実施した。

①東京・京都会場で4ヶ国語(日・英・中・韓)の音声ガイド制作。各会場利用数は下記の通り

東京) 日:65,318台 英:1,078台 中:1,376台 韓:372台 計68,144台 (日本語以外2,826台)

京都) 日:26,936台 英:215台 中:534台 韓:112台 計27,797台 (日本語以外861台)

②英中割引引換券(東京)=25,000枚作成・配布

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

輸送体制を強化し、会期中も警備・監視要員を十分に配置するよう各会場で努めたため、ヒヤリハット事例も含め、事故はなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

①輸送時に警備車両を伴走させるなど、当初から関係者で作品の安全を考慮して対策をたててきたが、所蔵先とも協議し、事故リスク回避等のため、当初の計画以上に航空便や美術品専用車を増やして対応し、安全に万全を期した。

②作品盗難や事故防止のため、常設されていない会場の展示室内にも監視カメラや盗難用アラームを設置し、磐石の態勢をとった。また通常の火災対策に加え、所蔵者などの要求に応じて消火器の増設も行った。

5. 紹介事例・今後の改善点等

世界的にも有数の人気を誇るファン・ゴッホだが、浮世絵の模写以外でも日本美術に非常に大きな影響を受けていたことは美術ファン以外にはあまり知られていない。本展では、構図・色彩・テーマなどの観点からファン・ゴッホが日本に影響を受けた作品を数多く展示し、日本美術との関連性を様々な角度から紹介するというコンセプトのもと、日本で初めてファン・ゴッホ美術館との本格的共同企画として国際的な展覧会を開催することができた。

一方でファン・ゴッホの死後にその影響を受けて終焉の地フランス・オーヴェールを訪れた日本人画家・識者らも紹介したが、これは日本側の学芸員が丹念に調査した結果であり、日本におけるファン・ゴッホの初期受容への影響を考察する貴重な機会となった。

偉大な画家ファン・ゴッホの生まれ故郷であるオランダと、そのファン・ゴッホに多大な影響を与えた日本の美術館が共同企画した展覧会が双方の国で開催されたことに非常に大きな意義があると思う。

本制度の適用を受けたことで、展示作品の質を高め、普及事業の開催や展覧会告知を当初以上に行うことができ、ファン・ゴッホと日本の関係性をより多くの国民に知ってもらうことができたのではないかと考える。本制度の適用については、チラシやホームページ等の広報物や公式カタログなどにも記載し、来場者に対して制度の適用を周知するよう努めた。

今後も、作品と来場者の安全面に配慮しながら、文化貢献となるよりよい展覧会を開催していきたい。

6. 展覧会の収支決算書

主催者名 北海道立近代美術館、東京都美術館、京都国立近代美術館、NHK、NHKプロモーション、北海道新聞社ほか

●収入

内 訳	決 算 額
展覧会収入 その他収入	1,326,438,101 円
共催社負担	4,000,000 円
収 入 総 額	1,330,438,101 円

●支出

内 訳	決 算 額
企画準備等基本経費	908,933,111 円
設営・運営等会場関係 費	421,504,990 円
支 出 総 額	1,330,438,101 円